

第2回府立図書館サービスの充実に向けた検討会議の議事要旨

1 開催日時

平成27年9月1日（火）午前10時から正午まで

2 場所

京都府立図書館（京都市左京区岡崎成勝寺町9）

3 出席者

原田隆史座長、大槻政美委員、小川雅史委員、桂まに子委員、清水 清委員、千歳則雄委員、富永敦子委員、内藤千鶴委員

4 会議の内容

- (1) 前回の議事録について
- (2) 府民アンケート結果・基本方針（仮）素案・サービス計画の方向性について（報告）
- (3) 基本方針（仮）素案及びサービス計画の方向性について（協議）
- (4) 今後のスケジュールについて

5 協議事項

○アンケート結果について

- ・ 郵送方式ではサービスを知らない人にも答えてもらっており、結果をどのように受け止めるかは考えなければならない。行っていないサービスでもこれだけの値が出たならばやる価値はある、というようにも考えられる。
- ・ 主に郵送方式について分析されているが、web方式はどう扱うか？
→府民利用施設のあり方検証の中で求められた「260万府民の府立図書館に対するニーズ」を捉えるために、従来の来館者アンケートではなく無作為抽出による郵送方式のアンケートを行ったもの。Web方式は、コアな利用者のより深いニーズの把握、より強みを伸ばしていくべきサービスの参考としたい。

○基本方針(仮)素案について

- ・ 方針全体としては、図書館の基本が別であり、その発展が1から3に書かれているように思える。まずは府立図書館の基本をしっかりと押さえることが大事。
→現在の運営の柱である市町村支援と調査研究支援を今回の「基礎的なとりくみ」に据え、そこに新たな事業を付け加えようと考えたもの。ただ、「基礎」と「発展」というくくりは館内でも議論となっている。
- ・ 市町村支援や調査研究支援は府立図書館の大きな柱になる。一方、図書館の基本的な取組は幅が広いものなので、たとえば障害者サービスなども丁寧に書き込むことができれば全体の厚みが増す。
- ・ 内容は、図書館としては実は当たり前のことで、どう書いてもこうなるだろうと思う。ただ仕掛けとしては、有名企業や本屋さんとのコラボレーションなど、府民にえっと驚いてもらえるようなものがほしい。
- ・ 「府立図書館はこんなことができる」というアピールに力を入れるべき。
- ・ 前文は府民1人1人に視点が当たっている感じで良いと思うが、3つの柱の方にも府

民に気軽に図書館を利用してもらえるような要素がほしい。

- ・支援を受けるだけではだめで、協働もしていかなければならないということは理解できるが、中身がまだ見えていない。
- ・協働について、結論ありきで進めるのではなく、府と市町村のすみ分けのライン引きはしっかり協議しなければならない。
 - 「府内の図書館サービスの充実のために一緒にやってみよう」という思いで書いたもの。具体的にはサービス計画でお示ししたい。
- ・広く府内を見渡して状況を把握できる府立図書館がハブとなることで、府全体の図書館サービスの向上を目指すものと理解した。ただ、行政用語で「協働」というと、便利に使われてしまうという側面もある。
- ・「多様な文化資源の情報を取り扱い」について、図書館がすべての資料を持つようにも見えてしまったので、もう少し表現を考えた方がいい。
- ・学校現場は大学等の知的資源を活用したいので、府立図書館には、博物館や大学が持つ情報へのコーディネート機能を期待する。
- ・客寄せ的な部分がないこともあって、来館者サービスにはそこまで重きを置かれていないように読めるが、京都にしかない情報や研究支援に焦点があたっており、大学関係者や学生へのアピールになると思う。
- ・柱の3番目のうち、場の提供と課題解決は別もので、柱は4つ5つになるのでは。
- ・府立図書館のみでの「場の提供」に留まるのではなく「同じような空間をどの図書館でも作れる」というモデルを示すこと、すなわち府立図書館が図書館の新しい姿をリーダーシップをもって府内に示すことが、府民サービスの向上につながる。
- ・府立図書館と市町村立図書館との共通カードの導入も検討しては。敷居をなくして外とコラボすることが時代の流れ。
- ・共通カードについてはかなりの検討が必要。また、図書館の予算は自治体によって雲泥の差があり、整備状況に違いがありすぎると「協働」とはならない。
- ・府内すべての市町村で進めることは難しい。図書館の広域利用といってもほとんど生活圏内に留まると思うので、システム化しなくても近隣との連携で十分に思える。
- ・各市町村の図書館業務システムの更新をにらみながら5年10年かけてじっくり調整してはどうか。
- ・利用者の個人情報了他館と共有することにも十分注意が必要である。
- ・「これまでの経緯と現状認識」が基本方針と一体のものであるなら、「当館が岡崎に位置」に「現在」を加えた方がよい。また、状況の変化については、ICTや書籍など外部のことだけでなく、利用者や図書館自体の変化のことも入れるとよい。

○サービス計画の方向性について

- ・場の提供について、場だけでいいなら他にも沢山ある。使う側にどのくらい分かりやすく伝えられるか、そして料金や手続きなどのハードルの低さも重要。
- ・場づくりには人の存在が大事。「場の提供」や「課題を解決」の部分に、人について一言あるといい。

- ・子ども読書支援について、アンケートでも大きな期待として上がってきているのに計画の中での書き込みが弱い。府立はこういうことをやるという具体策を示していただきたい。
 - ・府立図書館には、児童サービスにおいても見本となっただき、アプローチの手法などについて示してもらえるとよい。「直接サービス以外」という表現は考えてほしい。本を所蔵することや子どもの読書傾向を知ることでも市町村への支援になるが、その点にはあまり触れられていない。
 - ・学校の立場から見ると、すぐ本が手に入る、すぐ調べられるといったスピードが今の時代には売りになる。
 - ・長い目で利用者を育てる、文化と歴史を末長く伝えるという視点で、高校生が一度は府立に来るような読書会や学習会などの仕組みができればよい。
 - ・「多様な文化資源」に関して、図書館の生命線である本について、計画のなかに年間発行数の半分を購入することを盛り込めば大きなインパクトがある。予算的に難しいかもしれないが。
 - ・電子書籍についても、将来的には対応可能なように入れこんでほしい。
-
- ・視点に掲げられた広報戦略については具体的に検討し、広く府民に発信し浸透させるためのチャンネルを工夫してほしい。
 - ・アンケート結果に表れているように、府立図書館は府民にまだまだ知られていない。複数の大学と組んで大学生に取材してもらい、利用者側の視点でホームページやSNSで取り上げてもらってはどうか。
 - ・打ち出しは、他館と差別化を図れるようなインパクトのあるものがほしい。
 - ・見せ方の問題もある。当たり前のことをどう見せるか。
 - ・府立図書館の自由闊達さを活かし、「図書館がそんなことをしてはいかん」というタグを外してほしい。浴衣のイベントのような様々なアイデアやリクエストを募って、広報戦略の中でクリエイトを。
 - ・広報の入口は柱の3がよい。3で興味をもってもらって、次に1と2について知ってもらう流れ。また、偶然に府立図書館に出会えるきっかけを仕掛けてほしい。
-
- ・図書館法には「図書館協議会」という、市民の代表が館長に意見を述べるができる制度が定められている。図書館協議会に評価の仕組みをきちんと位置付けることで、図書館の運営やサービスはオーソライズされる。
 - ・この機会に図書館協議会を組織し、評価の仕組みをつくるべき。
 - ・きちんと内部で評価し外部で点検してもらうような仕組みがあれば、理事者にも理解してもらいやすいし予算の獲得にもつながる。
 - ・定量と定性、両方の評価が必要。ただし、定量評価において、府立図書館は市町村立図書館と違って、来館者数や貸出冊数、蔵書数だけではかるものではないはず。基礎と発展の取組が年次的にどのように進められているか評価する方法を考える必要がある。
 - ・サービス計画の方向性が決まる中で、評価の大枠についてもこの検討会議で考えていきたい。